飛行機に乗る怪しい紳士

田中貢太郎

青空文庫

A操縦士とT機関士はその日も旅客機を操って朝鮮海峡の空を飛んでいた。その日は切れぎれの雲が低く飛んで、二〇メートルと云う烈しい北東の風が、水上機の両翼をもぎとるように吹いていた。下には荒れ狂う白浪が野獣が牙をむいたようになっていた。

機体は木の葉のように揺れた。それは慣れているコースではあるが、二人にとってこれほど苦しい飛行はかつてなかった。A操縦士はハンドルに、T機関士はエンジンにそれぞれ全神経を集めていた。

突風に乗ったと見えて機体がぐらぐらとなった。T機関士ははっとして眼をあげた。機体は真黒い雲の中に入っていた。

（あぶない）

同時に体が浮くようになった。機体は猛烈な勢で落ちていた。

「あ」

T機関士は思わず叫んだ。しかし、それも瞬間、飛行機はそのままたぐんぐんとあがって往った。

（よかった）

T機関士はほっとした。そして、額の脂汗を拭きながら、見るともなしに後の客席に眼をやった。左側の二番の客席に、痩せぎすな一人の紳士が腰をかけていた。発動機の整備と云う重大な任務をもっているT機関士は、出発の時には何人よりもさきに機上の人となるので、したがって何んな客が幾人乗るか、そんな事にはすこしも注意しなかった。

（お客さんは一人か）

その時A操縦士がちらと後をふりかえった。風はますます烈しくなって、そのうえ雨さえ加わって来たので機体は無茶苦茶に揺れた。

T機関士は鉛筆を執ってメモに何か書いていたが、やがてそれを前にいるA操縦士に渡した。それには、

「客は一人か」

と書いてあった。するとA操縦士は前方を向いたまま軽く頭を揮った。T機関士はまたメモに鉛筆を走らした。

「では、二人か」

A操縦士の頭がまた左右に動いた。

（客席には一人しか見えないが、おかしいなあ）

T機関士は不思議に思って後を見た。客は依然として身うごきもしないで窓外を眺めている。

（やっぱり一人だ）

T機関士がそう思った時、A操縦士の右手が動いて、前の防風ガラスに指が往った。

「なし」

A操縦士は明らかに客はなしと書いたのであった。同時にT機関士は背すじに水をかけられたように思った。T機関士はあわてて鉛筆をとると、何かに追われるようにしてメモの上に走らした。

「そんなことはない、左側二番目の椅子に、たしかに一人いる」

その紙片を受けとってちらと眼をやったA操縦士は、これもはじかれたようにして後を見た。

「あ」

T機関士の云ったように、たしかに後の客席に痩せぎすな一人の紳士がいるのであった。その日たしかに乗客のないことを知っていたA操縦士はぞっとした。A操縦士は頭がぐらぐらとした。

しばらくたってからA操縦士はやっと心をおちつけた。そして、

T機関士に手真似で、

「往ってみよ」

と云うようにした。T機関士はうす鬼魅が悪かったが、それでも勇気を出して客室の方へ進んで往った。客室はがらんとしていた。

（へんだぞ）

T機関士はドアの後から椅子の下をきょろきょろと見まわしたが、今までいたはずの客の姿はどこにも見えなかった。

やがて蒼白い顔をして座席へ帰って来たT機関士は、夢中で三本の気弁桿を握った。三個の発動機は狂気のような大きなうなりを立て、回転計の指針は最大の速度を示していた。

T機関士は無言のままその指針を見つめていた。その時機体が生のあるもののようにぐらぐらと揺れた。

この話は次の二題とともに、平野嶺夫君の「航空日本」による話である。

青空文庫情報

底本：「日本怪談大全　第二巻　幽霊の館」国書刊行会
　　1995（平成7）年8月2日初版第1刷発行
底本の親本：「日本怪談全集　第一巻」改造社
　　1934（昭和9）年
※「次の二題」とは「人のいない飛行機」「追っかけて来る飛行機」です。
入力：川山隆
校正：門田裕志
2012年5月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

飛行機に乗る怪しい紳士

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/